

大津
歴博
だより

2019
No
115

contents

特集	パリ大津絵展開催記念 企画展 P1～P3 大津絵 —ヨーロッパの視点から—
学芸員のノートから	悉皆調査するということ P4～P5 法明院史料調査より
活動報告	常設展示 P5 大津絵コーナーのリニューアル
収蔵品紹介	葛川村延宝検地帳（葛川坂下町蔵） P6



大津市歴史博物館

令和元年 8月 20日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

特集

パリ大津絵展開催記念 企画展
大津絵
—ヨーロッパの視点から—



大津絵 槍持ち鬼奴 江戸時代 フランス 個人蔵

Des imagiers du Tôkaidô à Miró

Les peintures d'Ôtsu furent introduites en Europe au cours du xx^e siècle, dans le sillage du mouvement de défense des arts populaires japonais (*mingei*) initié au Japon dans les années 1930 par le penseur Yanagi Muneyoshi (1889-1961), qui avait permis de les faire redécouvrir. Pablo Picasso, qui s'intéressa particulièrement aux estampes *ukiyo-e*, en collectionna.

C'est au sculpteur Eudald Serra (1911-2002) et au collectionneur Celis Gomis (1915-2000), originaires de Barcelone, qui séjournèrent au Japon dans les années 1930 et 1940 et furent en contact avec le mouvement *mingei*, que l'on doit la première grande exposition d'art populaire japonais et de peintures d'Ôtsu, organisée dans la capitale catalane en avril 1950.

Fondateur avec le photographe Joaquim Gomis du groupe *Cobalto 49*, pour promouvoir l'avant-garde catalane, Serra fit découvrir cette imagerie à des artistes comme Joan Miró, qui manifesta un enthousiasme particulier pour ces peintures primitives. La simplification des formes, la liberté graphique, la naïveté et l'esprit humoristique de ces peintures entrèrent en effet en résonance avec les recherches plastiques de l'artiste, alors en quête d'un langage universel.

Joan Miró et Eudald Serra à l'entrée de l'exposition d'art populaire japonais Barcelone, avril 1950

Miró à l'exposition d'art populaire japonais devant la peinture d'Ôtsu de Tametomo (n°7-2) Barcelone, avril 1950

Photo: Joan Miró, Otsu, Musée de l'Art Moderne de la Ville de Paris. © Eudald Serra, Otsu, Musée de l'Art Moderne de la Ville de Paris.

「東海道の絵師からミロへ」コーナー

パリでも大津でも、大津絵が勢揃い

去る4月24日から6月15日まで、パリ日本文化会館で企画展「OTSU-E peintures populaires du Japon (大津絵—日本の庶民絵画—)」が開催されました。

本展は約120点の作品、資料が展示された充実した大津絵展であるばかりでなく、このような大規模な大津絵の展覧会の開催自体がヨーロッパで初めてのことでした。

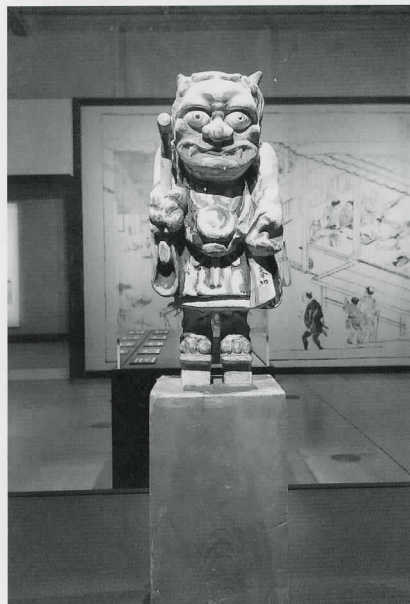
内容も江戸期の大津絵に加えて、浮世絵の大津絵や近代の絵変わり、大津絵および史料等が紹介されました。さらに、鬼の念仏をよしめとした大津絵フィギュアともいえる立体



ずらりと並んだ大津絵フィギュア

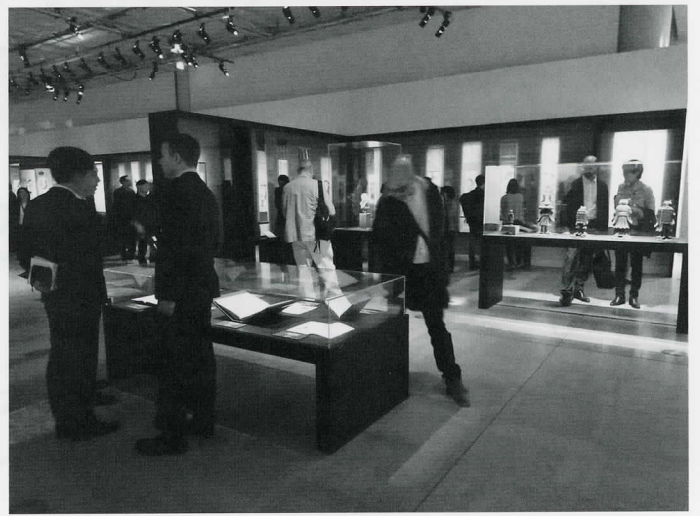
作品が19点も並び、フランスの方々の眼を楽しませました。

もっとも、ヨーロッパで従来より知られていた日本美術と



言えば、浮世絵や根付、伊万里焼などであり、大津絵の知名度は皆無といえる状況でしたが、本展では7480名の方々ご来場いただくことができました。これは知名度が無かったハンデを考えると大健闘した数字といえます。

このように、多くの



会場内の様子

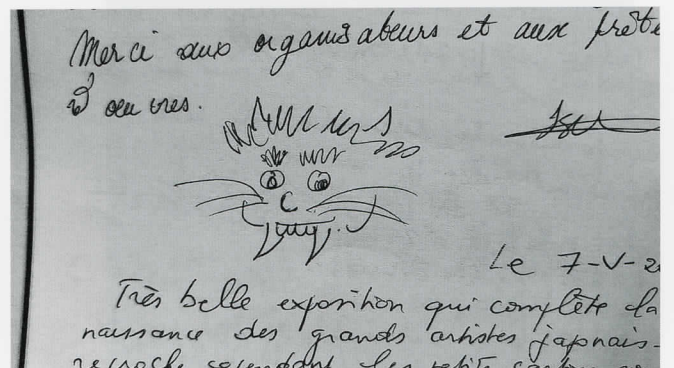
フランスの方々が、未知の日本美術の展覧会にもかかわらず来館されたのですが、彼らがみせた反応は、一体どのようなものであったのか、会場に設置された感想ノートから数例をご紹介します。

「新しい(絵画)テクニクの発見。とても美しい、かつ勉強になる展覧会」「日常、そして庶民画からの気づき。滑稽で詩的」「全てが、かつ明快、知識やテーマが分からなくても楽しめた。」

実に斬新な感想です。フランスの方々は大津絵の特徴を、実によく理解して楽しみ、大津絵の絵画造形そのものに魅せられて楽しんでいただけたことがわかります。

そのことは、感想ノートにも如実に表れていて、感想文も5、6行にも及ぶ熱い記述が多くみられ、さらに、鬼のイラストを添えた方が何人もいらっしゃいました。これを見て筆者は、フランスの方々は大津絵を美術として鑑賞している以上、漫画やアニメ、続く日本のキャラクターとして「お気に入り」に加えていただけたのだと思いました。

さらに、アンケート結果も上記の反応に呼応するかのよう、当館の予想を上回るものでした。まず、大いに満足が79.6%、そして満足が16.9%、普通は3.5%であり、不満大いに不満は、いってよ、とも、0%でした。



鬼のイラスト

このように、フランスで好評であったパリ大津絵展を記念して、同展で展示された作品約70点を中心に、大津市歴史博物館では、ヨーロッパの文化人や芸術家の視点からみた大津絵という切り口で、パリ展を再構成して、下記の通り、展覧会を開催します。

◇企画展「大津絵 -ヨーロッパの視点から-」

会期 令和元年10月12日(土)～11月24日(日)

パリ大津絵展における成果の一つは、日本からの出品だけでなく、ヨーロッパにおける大津絵の所在を確認し、それらを多数展示した点にあります。

このことからわかるように、ヨーロッパにおいては、大津絵は、一部の人々の間では認識されており、有名な美術商の林忠正やチコティンが扱ったことや、フランスの人類学者ルロワ、グランによる大津絵調査、スペインのゴミスやセラによる収集、ミロの大津絵への傾倒、ピカソによる大津絵の所蔵、などが分かっています。

これらヨーロッパの人々による大津絵への熱い眼差しを、ぜひとも紹介したく、大津歴博の秋の企画展では「ヨーロッパの文化人や芸術家の視点からみた大津絵」というテーマで展示をいたします。

展示では、従来、日本では知られていなかった大津絵とヨーロッパとの関係を写真パネル等で紹介する一方で、大津絵の表現がどのように彼らに受け止められ、影響を与えたのかという点について、パリ展の展示コーナーを一部再現しつつ展示いたします。以下、パリ大津絵展の展示風景をもとに、今秋の展示の一部を紹介したいと思います。

まずは「1950年バルセロナ日本民芸展コーナー」です。1950年、民芸愛好家のセルノ・ゴミスと現代彫刻家のエウダル・セラの尽力によって、バルセロナの王立美術協会主催で、スペイン初の日本民芸展が開催されました。同展においては、5点ほどの大津絵が陳列されただけでなく、スペインを代表する20世紀の画家ジョアン・ミロが訪れ、

このほか大津絵に注目し、作品と一緒に、記念撮影をするなど、深く大津絵に傾倒するきっかけとなった展覧会であったことに焦点をあてます。あわせて本コーナーでは、同展のパンフレットや目録資料も展示いたします。

つづいては「鬼 Demons コーナー」です。



鬼 Demons コーナー

大津絵の画題で、人気の高さや画題バリエーションの豊富さにおいて、鬼の右にできるものはありません。本コーナーでは、17世紀にまでさかのぼる最古級の強面の鬼から、滑稽で憎めない姿となった18世紀の鬼たちまでが一堂に会します。様々な変化する鬼たち、会いに来てください。

最後は「絵変わり大津絵コーナー」です。

フランスをはじめ、ヨーロッパでは、本来の街道の土産物の大津絵だけでなく、アレンジされた大津絵が、密かな人気ジャンルでした。画家や文化人が趣味で描いた大津絵や、根付や彫像などにアレンジされた大津絵などが好んで収集されました。とりわけ本コーナーでは、19世紀末のシャポニズムの時期に収集されたデヌーイ美術館のコレクションにスポットを当てます。

パリ大津絵展を見た方も、そうでない方も、これまでとはひと味違う大津絵をぜひご覧ください。

(学芸員 横谷賢一郎)



バルセロナの日本民芸展を訪れたミロ(右は同展出品の大津絵)





新発見の法明院史料（一部）

屋根裏とは別の場所から 新たに大量の史料が出たという
ことで 急いで法明院へ向かうと 押し入れいっぱい納
められた史料の山が待ち構えていました。その場でいくつ
か開いてみると 江戸時代よりも古い中世のものが次から
次へと ^{めまい}眩暈を覚えながらひたすら梱包して館に運
び入れている時の 驚きと困惑が入り混じった感情は今でも
忘れられません。その後調査が進むにつれて フェノロサ

やビゲロ らの受戒に関わる直接的な古文書や 現存最古
の内容と思われる「二十五三昧式」といった貴重な史料が
大量に発見されました。そのうちのごく一部分は企画展で公
開することが出来ましたが 大部分はまだ調査中で その
後も重要な史料が続々発見されています。

色々あった企画展も無事(?)終わり さあこれから と
考えていたところ 改元後の5月中旬 出陳品の返却で法
明院にお伺いした際に また別の押し入れに大量の史料が
しまわれているのを見つけました。後日改めて調査 に行った
ところ 大量の古文書の中から 宇都宮先生が仰られた「重
要なお経」が発見されました。それも当初の想定をよるか
に超えた量が 。実は 先の悉皆調査では確認できなかった
ため「もう失われてしまったのでは？」との危機感があつた
のですが 企画展の終了後に悉皆調査の本命が見つかる
という 大どんでん返しが待っていたのです。

現在も たくさんの方々にご助力いただきながら少しずつ
調査を進めています。いずれは新しく見つかった史料を紹介
できればと考えていますが あまりの量の多さ につくなる
やら 。 (学芸員 鯨井清隆)

活動報告

常設展示 大津絵コーナーのリニューアル

常に大津絵を数多く鑑賞できる施設があればという要望
に応じて 常設展示室内の大津絵展示を拡充しました。

これまでは軸装 5 幅程度の展示でしたが リニューアル
後は 大津絵の軸装 10 点のほか 大津絵の図柄を用いた
菓子木型や大津絵人形などをあわせて展示し 常時 20 点
程度 ^{きがた}の関係資料で いつでも大津絵の魅力に親しんで
いただけるようになりました。展示では 大津絵以外にも 大
津算盤や和菓子など ^{そろばん}江戸時代の大津の名産品や商工業
の全体像が理解できるように工夫しました。作品は 2～3
か月を目途に展示替えを行ないますのでお楽しみこ



賑やかになった大津絵コーナー

平成31年3月2日(土)から4月14日(日)まで開催された当館企画展「フェノロサの愛した寺 法明院 三井寺北院の名刹一」では、連日大変多くの方が来館され、盛況のうちに終えることができました。

明治時代に来日したフェノロサやビゲロらが愛した法明院そのものの歴史を紹介する初めての展示で、課題も多々残りましたが、それ以上の成果を残せたのではないかと思います。

当初、展示のベースとして考えていたのは、先に調査の終わっていた掛軸などに合わせて、池大雅や円山応挙、鶴沢探索らによる堂内の襖絵など、主に絵画史料でした。また「法明院展」という名前では一般の方々馴染みがないため、できるだけわかりやすい名前を考える必要がありました。そこで思い浮かぶのが、アネスト、フランシスコ、フェノロサやウィリアム、スタジス、ビゲロというアメリカ人です。彼らは明治時代に日本を訪れ、日本美術の収集を進める傍ら、文化財の保護にも尽力した人物として知られています。彼らは当時法明院住職であった桜井敬徳から受戒しており、彼らに関する史料が今も法明院に残されています。当館では既に法明院から近代史料を一括でお預かりしており、目録を作成していました。そこで「絵画作品」と「フェノロサ、ビゲロ」の二本立てで行こうと考えていました。

まず初めに、法明院そのものの歴史を考える必要があるのですが、これまで法明院の歴史を紹介したものはほとんどなく、不明瞭な点が多々ありました。そこでまずは法明院に所蔵される史料を把握することから始めました。そのうちのひとつが、法明院の版本聖教の調査です。法明院には歴代住職が集めたおよそ7000冊を越える膨大な書物が遺されています。しかし、中身がどのようなものか不明であったため、およそ30年近く前に版本聖教の悉皆調査をしていた滋賀県立琵琶湖文化館から目録をお借りし、デジタルデータ化を行いました。そして、どう考えても人手と知識が足りないため、龍谷大学の犬谷由香先生をはじめ、仏教学を専門とする方々にご協力を賜い、まずはこれを改めて調査しようということになりました。それと並行して、池大雅や円山応挙、鶴沢探索らによる襖絵の調査と撮影を行いました。



法明院版本聖教の調査風景

こちらについては、大阪芸術大学の五十嵐公一先生にご協力を賜うことができ、数多くの新知見を得る事が出来ました。そして、フェノロサやビゲロら近代に関する調査については、愛知学院大学の井上瞳先生にご協力いただくことで、特にビゲロ直筆の手紙類などの翻訳を進めることができました。

このようにして、各先生方のご協力を賜いながら手探りで調査を進めて行ったのですが、その最中、大阪大谷大学の宇都宮圭吾先生から「法明院には非常に重要なお経がある」というお話がありました。実は法明院の屋根裏に、ほとんど手つかずの史料が大量に保管されていたのです。いずれはと思いつつ、あまりの量の多さになかなか踏み切りがつかなかったのですが、ご住職にご相談し、これも悉皆調査することになりました。ただし、お寺と当館の都合から、史料の引上げは11月に行うことになりました。

11月末、大谷先生と井上先生にご同伴いただき、ご住職立会いのもと、法明院の屋根裏にある史料の悉皆調査を行いました。暗くてホコリとカビが充満した屋根裏でひたすら史料を確認し、それらを下に降ろして車に積んで館に運び込む作業を丸1日かけて行いました。終わるころには全身ホコリだらけ、マスクの内側が真っ黒という状況でしたが、結果としておよそ館内の1部屋がまるまる埋まるほどの量となりました。これだけ大量の史料が見つかった驚きや喜びも当然ありましたが、それと共に、企画展開催を3月に控えた時期でもあり、史料を前に「どうしよう?」という困惑を抱えながら、いあえずよできる範囲で掃除と整理を行いました。

焦れが募っていく中でひたすら作業をしていた矢先の12月初め、ご住職から連絡が入りました。「また出てきた」と。

葛川村延宝検地帳（葛川坂下町蔵）

元禄 11 年（1698）本堅田に拠点をおく堅田藩領（堀田家）が成立し、湖西の村々が領地、組み込まれました。その中で、葛川地域の8ヶ村のうち7ヶ村が堅田藩領になったことは意外に知られていません。昨年度、大津市歴史博物館で、その支配や村政の実態を調べるため、地元、古文書や古記録が残されていないか、葛川学区自治連合会を通して各自治会にお尋ねしました。その後、坂下町から「古い資料がある」とお応えを頂き調査、お伺いしたところ、堅田藩、関係する古文書を数点見出すことができました。

ところが話はそこで終わりません。実は坂下町共有文書の中から、堅田藩領時代以前の歴史を知る、非常に重要な史料「葛川村延宝検地帳」を発見したのです。

検地といえ、土地を測量して米の産出量を確定し、そこから税金（年貢）を算出するための前提作業で、豊臣秀吉による太閤検地や、徳川氏による慶長7年（1602）の近江検地などが有名です。今回発見の検地帳は、延宝5～7年（1677～79）畿内近国の幕府領（天領）の村々で実施された検地時のもので、それまでとは異なり、6尺を1間、300歩を1反、田畑の等級を上々、上、中、下、下々の5段階とするなど、統一基準が設けられた検地でした。近江国では、同7年、彦根藩井伊直興と大垣藩戸田氏西により実施され、村ごとに冊ずつ作成されました（もしくは村の規模により数冊、分冊）。また、基本的はこの測量データが幕末まで利用されましたので、葛川7ヶ村が幕府領から堅田藩領へと変更となった後も、この延宝検地データが運用されたということになります。

そこで「葛川村延宝検地帳」を詳しくみると、まず延宝7年3月7日付で、戸田左門（氏西）家臣の戸田権兵衛を、検地惣奉行として、当（葛川）村検地奉行、西嶋芝右衛門、堀内八太夫、杉田全平の3人が担当して実施、作成されたことがわかります。

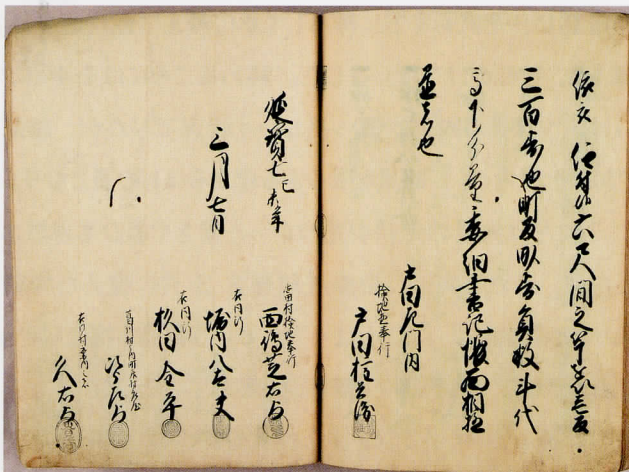
ただし注目したいのは、この検地帳が坂下村だけでなく、当時山門（延暦寺）領であった坊村を除く、幕領であった葛川村7ヶ村すべてのデータを1冊、まとめたものであった点です。

その記載内容は、村ごと、①所在する字名、②「古検」（慶長7年に実施された際の土地の広さ）、③種別（田、畑、屋敷地）と等級、④（延宝検地時の）土地の広さ、⑤分米（算出された年貢量）、⑥耕作人、⑦斗代（査定された平均収穫量）を書き上げます。また筆数（土地の登記単位）は、坂下（266）、木戸口（236）、中村（408）、町居（128）、榎（18、幕府領のみ）、貫井（24）、細川（327）の合計1597筆を数え、総面積にして44町3反4畝25歩（約44ヘクタール）、石高にして304石6斗5升6合となり、土地の種別を見ると、まづ「畑」で占められていて、検地帳からも葛川の山間村落としての特性も見えてきそうです。

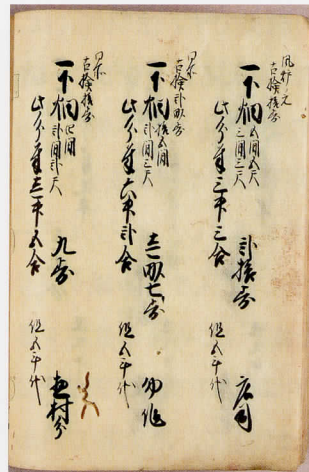
さらに、検地帳には、これ以外、年貢徴収の対象になっていない荒廢地（109筆）が22町5反3畝8歩（約22ヘクタール）、年貢高にして201石6升4合も記録され、葛川7ヶ村の土地のうち、水害や百姓の耕作放棄等による荒廢地が相当数あったこともわかります。これらは葛川7ヶ村分の合計約1700筆のデータを一つ一つエクセルに入力してみて、ようやく

見えてきたものです。

今回、堅田藩関係資料のための史料探索が思わぬ発見をもたらしましたが、堅田藩領時代も含め、葛川地域の支配や土地利用、さらには住人の生活史の解明はまだまだこれからです。長い道のりになりそうです。



（検地帳末尾）検地奉行らによる署名部分



（検地帳部分）3筆分を記載

（学芸員 高橋大樹）